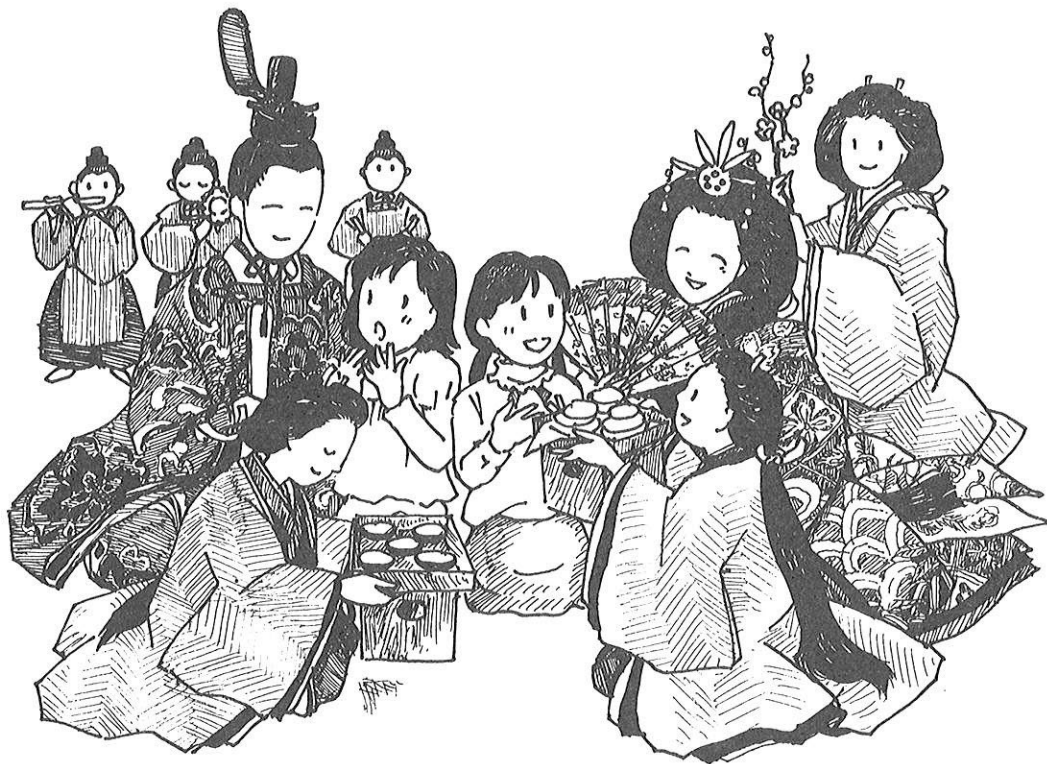


光の子



No.147 2011.5.1

●年間聖句 光の子として歩みなさい。(エフェソの信徒への手紙 5章8節)



東日本大震災において被災された方々に
心よりお見舞い申し上げます。

社会福祉法人 光の子どもの家

「ひなまつり」

挿絵・中島由起子

春夕焼

子を呼ぶ声のはるかに春夕焼

一湾を埋めつくしたる春の潮

燕くる水のまぶしき日なりけり

朝寝して遥かにしたる海の音

春の闇納戸にうづくまつてをり

あしかびに突き立てである水棹かな

ひたすらに流れてをりぬ春の鳶

黛 執

(「春野」主宰)

新しい子どもたちの時代のために

理事長 菅原 哲男

社会福祉法人光の子どもの家は、この年新たな二十七年目を迎える。これまで故福島勲と、飯田進に法人を代表する理事長にご就任いただき、多くの困難を克服する陣頭指揮をいただいていた。

福島理事長には草創の苦難を担っていたいただき、その途上に天国に送らざるを得なかった。

飯田理事長にはこの上もない大きな困難時に、自ら火中の栗を拾うようにご就任いただき、その困難を克服していただいた。

おかげさまで創立二十数年を過ぎて、どうやら一人前に近い社会福祉法人に成長し、児童養護施設のはたらきもある程度の基礎ができあがってきた。そんな昨年、第九十四回理事会において健康上の理由から辞意を表明されて、様々な慰留の上に、病因を明らかにされてご退任のやむなきに至ったものである。

その結果を受けて、全役員の推薦により小生が理事長の重責を担うことになった。もとより多くの方々が危惧するほどの痩せた人格のものである。荷がかりすぎることは分かります。荷がかりすぎるのだから、他者にこの苦しい困難を担っていただくわけにもいかず、創立を志した者でもあり、引き受けざるを得なかった。そんな事情をご賢察賜り、これま

でを超えたご支援ご鞭撻のほどを各位にお願いするものである。社会福祉法人の理事長をお受けして、その責任と権限について法令等を読み返してみ、その重大なることを改めて知った次第である。

こんな重大なことを、これまで先代先々代の理事長はこなしてきていたことも大きな驚きでもあった。

さて、小生はそんなに有能ではない。何しろ経済感覚はほぼゼロのようなもので、施設長在任時代から書記に丸投げでやってきた。書記は当初から創立の同志であった田中現施設長である。何のこだわりもなくやつてもらってきた。それで諸々は上首尾の運営であったのである。

しかし、今後はそんなわけにはいかない。心から思っている。経済の動きや始末の付け方、そして経営責任をだれにでも説明できるようにしなければならぬと考えている。今は創立の同志だけでやってきた時代とはまるで違ってきている。経済規模は創立の頃の約四倍近い。そして事務員は複数いる。経済の流れを知り、適切な判断もしなければならぬ。丸投げというわけにはいかない事態だと思っている。初めから教えてもらいながら把握するよう努力し、責務に応えたい。

この度の大震災には肝をつぶした。



原発事故などに典型する人のおごりが、自然の営みを超えてしまったことを身にしみて感じました。抑えた明かりのお店に行くと、アメリカのスーパーマーケットを思い出した。オール電化は今回お年寄りに悲惨な暮らしをもたらした。本当に必要なものだけを取り出したら、ほんの少しで足りることが何とも多いことを確認させられ、個人的にお引き受けた被災家族の安全と帰郷への強い思いを受けて、なお強く思ったことである。

創立を志したとき、子どもたちのための施設建設と運営に心していくことを決意したのに、それがかなり怪しくなってきたことも感じられる頃である。

今こそ、真に子どもたちのために必要な関わりや物事を抽出しながら、子どもたちの日常を営んでいくことに心したいと強く思っている。いつの日にか、ここにいるすべての者たちがここにいたことを懐かしく思い出してくれることを願い、集まった手練れの、そして若い職員たちから教わりながら歩みを始めていく。

事は、東京に出かける旅の途次で起こった。

財布にあまり現金が入っていない。山形駅の一階にあるATMでキャッシングしようと思

い、長いこと使っていなかった銀行のカードを

おうとした。

暗証番号をATMに入れた

とを始めて

したところ、暗証番号が違っ

ているという表示

一回やったら

ここで、やめ

ばよかったの

にあわてて二

度、三度とや

つて「このATMでは取り扱

いできません

で、銀行に直接

行って、・・・

という表示が出

てしまい、万事

休すである。要するに、カードの暗証番号を記憶

違いしていたので

ある。学長をして

いたとき、出張

旅費などの振り込

みに新しい通帳

が必要だということ

で作った通帳

を、学長を辞めたあ

日常生活、その難儀なことども

前山形大学学長 仙道 富士郎

いた。学長秘書に通帳のすべての処理をしてもらっていたので、実際に自分でカードを使ってキャッシングをしたことはなかった。暗証番号は紙に書いたものをもらった記憶があり、その時点では、番号も覚えたはずである。

しかし、歳は取りたくないもの、この一連の事柄が頭の中に記憶として入っていない

だったのである。実際に使った番号は、妻が管理している自宅の通帳の番号だったのだ。

「困ったときの奥様頼み」とばかりに妻に電話した。発車時間が迫っているから、キャッシングは持

って行ってやれない。キャッシングカードで現金化できるから」との

話。でももうカードでのキャッシングは嫌である。さきほどの話がトラウマになって、キャッシングカ

ードの暗証番号も怪しくなってきた。

その時の東京への旅はケチって

なんとかやりお世話だが、銀行の通帳を作りな

おとして、新しいカードを作らなければ

らちがあかない。その事がまた一人

で出来ない。妻に銀行へ連れて行

ってもらった。本人が暗証番号を決めなければ

ならないと言われ、誕生日を番号化

したら、銀行員に見破られ、また

また困ってしまう次第。

妻は「あなたが一人になった時に、一人で出来なければ困るから」と私の教育に乗り出し、郵便為替

とか銀行振り込みのやり方などを現場指導しようとするが、なかなか上首尾に行かない。大体が、郵便

便為替の自動振り込み機などは、複雑な過程が

たくさんあり、また現金を入れるとすぐに蓋が閉まり、

ドキドキすることおびただしいのである。

最近では妻の指導よろしきを得て、ATMから銀行のカードを使

って間違いない現金を引き出すことは出来るようになったが、妻にと

がめられることなく、現金を手にすることが出来るようになったこと

で、やたらと無駄使いするようになり、一応、私の私用とされてい

る通帳の残金は急速に減っていき、青くなっている始末。

パラグアイでのシニアボランティアを終えて帰国して、以前のよ

うに月曜から金曜まで、決まった時間に出かける必要はなくなり、

いわゆる自由人になった(その分お金は不自由にな

ったが)ことで、生活パターンが以前とは異なり、

家に居る時間が大幅に増えた。こ

こいらでちよつと自慢げに言わせ

てもらえば、この私とて、随分家

ですることが増えた。まず、朝食を作るのは私の役目である。朝食

といっても、レモンを一個分加えた野菜ジュース、バターを塗った

トースト、とインスタントコーヒ

ーを用いたカフェオレだけの簡単なものではあるが、ゴミ投げも私

の役割、妻がパッチワークの会で留守にしている時の生協から届く

食品の受け取り等々、結構忙しいのである。

とはいっても、側で見ていると、主婦のやらなければならぬ家

事労働の負担の大きさに、正直

いつて驚かされている。この家事労働に対する報酬という概念をし

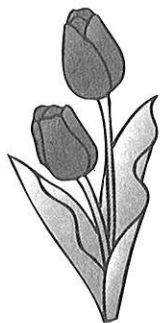
っかりと考えの中にいれ込んだ社

会制度を構築しなければ、虚構を

上塗りする形の新制度になりかねないと思

っている。当分は豊かな時間を利用して、本

本を読み、インターネットの情報を把握しながら、我が国の、この



閉塞状況が何とかならないのかを考えていきたいと思っている。もちろん、生活者としての腕も磨きながら(?)。

「共育ちカンガルー日記」

(12) 初めて虹を見た日

近藤みちる

ユキに初めて買ってやったクレヨンで、私が最初に描いて見せたのは虹の絵だった。

「いつか本物の虹と一緒に見ようね」

そう、私にはユキに見せてあげたいものがたくさんあった。季節を告げる草花たち。昆虫や動物。刻々と変わりゆく空の色、雲の形。そして雨上がりの明るい空に現れる美しい虹。

散歩に出ると、私はユキが喜びそうな物を見つけては、指をさしてそれを教えようとしたものだ。ところが、ユキが私の呼びかけに反応してくれなかった。ただの一度もなかった。ユキとの散歩は、いつも儀式のようだった。道順も決まっていた。毎回同じ場所ですこる拾いに没頭し、棒きれを見つけると振り回した。道路標識があると必ず立ち止って食い入るように見入り、同じ家の表札の前で立ち止まった。橋の上に来ると、欄干から身を乗り出して石を投げ入れ、広がっていく波紋を何十分でも飽きずに見つめていた。ユキの目に映っている世界は、私の見て

いる世界とはまるで別の世界であるかのようなだった。一緒にいても、私は一人ぼっちだった。そしてユキもまた、一人ぼっちだった。

ユキと同じ頃に生まれたお友達は、まだ歩けない赤ちゃんの頃から、大人が指差した方に目を向けたり、自分が欲しいものを指差してみせたりしていた。のちに、これが「共同注意」と呼ばれる乳幼児の心理発達上必須の行動であることを、私は療育センターで教えられた。共同注意はおろか、ユキはまだ人という存在を統合的に認識できていないという現実も知らされた。ユキにとっては、私の声も顔も手も足も、それぞれがバラバラの物としてしか認知できていないという現実も。

このころユキは、欲しい物があるとき、私に向かって「ちょうだい」と要求するかわりに、私の手を持って自分の欲しい物へと近づけるといいう、変わった要求の仕方をしていて。それはまさしく「クレーン現象」と呼ばれる自闭症特有の行動だった。私の手はユキ

にとっては、何でも取ってくれる便利なマジックハンドでしかなかったのだ。

悲しかった。この手は私の手であり、ユキの母親の手なのだ。母親とは、ただの手でもただの足でもなく、ユキを全身で抱きとめ、頼ずりし、語りかけ、歌い、誰よりも大切に守り育んでいく存在なのだ。知って欲しかった。母親として、ユキにしてあげたいことも見せてあげたいものもいっぱいあった。

療育では、共同注意を引き出すための様々な訓練が行われた。「共同注意が出てくると、ユキちゃんの心の世界はぐんと広がります。」先生方の言葉にすがると、私は来る日もくる日も、ユキと散歩に出た。「たんぽぽだよ」「ちようちだよ」たとえ一方通行でも、私はユキにこの手を差し出し、顔をのぞき込み、声をかけ続けたのだ。

三歳の誕生日を過ぎて程なくして、その日は突然訪れた。澄み渡った秋の空一面に、とんぼが飛び交っていた。「とんぼ、いっぱいだね」空を指差しながら、私はいつものようにユキに声をかけた。するとユキは眩しそうに空を見上げて、みるみる瞳を輝かせたのだ。そして大きな声で「とんぼ！」と叫んだのだ。ユキの瞳には、とんぼの群れ飛ぶ秋の空が映っていた。それは私の見ている空と同じ空だった。

それから、私たちは毎日たくさんの小さい秋を見つけて歩いた。どんぐり、カマキリ、紅葉、燃えるような秋の夕焼け。やがて冬が来た。木枯らし、白息、薄氷、冬の芽。私たちは、小さい冬もたくさん分かち合った。

十二月のある朝、私はいつものように洗濯かごを抱えベランダに出た。朝方まで続いた冬の嵐は、風雨に飛ばされた大量の落ち葉と生暖かい南風を残していった。雲が晴れて明るくなった西の空には、今まで見たこともないほど色鮮やかな、大きな二重の虹がかかっていた。洗濯かごを放り出し、私は居間でテレビを見ていた娘のユキに向かって大声を上げた。「ユキ！虹だよ！」

ユキは私の指差す空を見上げるや否や、目を大きく見開いた。そして小さな指で、私と同じように空を指し、私に負けないくらい大きな声で「にじ！」と叫んだ。それはユキが生まれて初めて見た虹だった。そして私たちが初めて一緒に見た虹だった。

やがて虹は、雨上がりの空に溶けて吸い込まれるように、静かに消えていった。(またいつか、こんな綺麗な虹をユキと一緒に眺めることができそうですように)私は消えゆく虹に、そんな願いを託したのだ。

手おんぶのゆらゆら虹の消ゆるまで
みちる

珍品名品

中島 睦雄

テレビで「開運なんでも鑑定団」というのをやっている。人気のある番組らしいが、私も見ている。あれは気楽に見ていられるからだ。そして、時には品物の鑑定依頼人と一緒に喜んで、残念がつたりして、約一時間くらいを楽しんでる。

この番組では変てこな恰好をして、変てこな事を言ったりする人はいないし、時代おくれの私には理解できない言葉でギャーギャー言ったりする事がないから、安心して楽しめるのである。ところで、実は、私も珍品名品をいくつか持っている。と言いたいが、本当の珍品か名品か私自身疑わしいものと思っているものだから、まあ、余り表には出さない方が無難なようである。

まず、小林一茶の俳画がある。小さい掛け軸で、相当に古いらしい。上と下にある木の横軸は、虫くいだらけでどうしようもない。目出度さも

ちう位也

おらが春 一茶

という句があり、門松のような絵が、あっさり描いてある。調べてみると、この句が作られたのが文政三年(一八一九)小林一茶五十七歳の時となっている。今から一九二年前、徳川家斉の頃である。

こうみてくると、大分古い時代に作られた句であることがわかる。文字と絵の描かれている紙の部分はどうかというと、これも茶色に変色し、かなり古い感じのものである。

しかし私は、これはニセモノだと思っている。その根拠は何か。それは、文字がうますぎるような気がするからである。流れるような品の良い文字にあっさりとした絵。

小林一茶という俳諧師が、このようなうまい文字を書いたろうか。もっと別な味のある文字を書いたのではなからうか。小林一茶の文字を見た事がないから、想像に過ぎないが、この俳画は書家の書いたものではないかと思っている。一茶とは書いてあっても花押も落

款もない。したがってこれは、一茶の句を書いたものではあっても、一茶が書いたものではないと思う。こんなものは人に見せられたものではない。

これに対して、真筆も真筆、本物の水墨画が一幅ある。

中村不折の絵である。たて一三五センチ、よこ四二センチで、表装した普通の掛け軸である。中村不折は洋画家であり、日本画、書も書いた帝国芸術院会員、昭和一八年に七八歳で歿したと、ものの本に書いてある。

これが正真正銘の本物であるという根拠は、生前の父の知り合いが中村不折と知り合いで、この人に頼んで描いてもらったという話を、父から聞いていたからである。画面の上の方に、ただの円のような月があり、その下の方に単純化した山々が描かれていて、その余白の部分などと、実にうまく構成された水墨画である。「月下○○」と書いてあるが○○の文字は読めない。

父の生前には、毎年秋になるとこの絵を床の間に掛けた。私もその絵には長く親しんでいたで、父の死後も、秋には絵を掛けて楽しんだ。私はこの絵を、ことのほか大切

にしていたが、お客様たちは殆んど関心を示さなかった。この絵のある部屋でお茶を飲みながら雑談することも多かったが、こんな名品に、誰も見向きもしない。かと言って「この絵はねえ・・・」などどこらの考えを押しつけるのはばかられる。

骨董趣味の人の所へ行くと「この壺はねえ、これこれこういう人が作ったものでね、すごいんですよ・・・」などとやられると、いい加減参ってしまうものだ。それから私は、中村不折の絵を、人に押しつける事はしない。

ところで、例によって或る秋の日に、この名品を床の間に掛けておいたところ、当時五、六歳だったろうか、うちの娘が、こともあろうに不折の絵に鉛筆で落書きをしてしまったのである。みんな大慌てで「消せるか?」「大丈夫か?」とさわいでいる時に、そこに居合わせた私の弟は「中村不折の絵に加筆するなんて、すごいなあ。これの子は天才かも知れないぞ。これで絵が一層良くなった。」などと、無責任な事を言っ笑っていたのである。



春の暖かさを少しずつ感じる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。佐藤家の子どもたちは、今日も元気に過ごしています。今年度もあつという間に終わろうとしています。子どもたちは今年度も本当によく頑張り、成長を見せてくれました。その様な子どもたちの成長を近くで見続けることができて良かったと思っています。当たり前前の事が、本当に幸せな事なのだと改めて感じた一年でした。

先日、小学生の英恵の作品が特選に選ばれました。展覧会場へ一緒に行くと、英恵は自分の作品が飾られているのを見て、とても誇

佐藤家



らしい表情をしていました。英恵が一生懸命、丁寧に作ったからこそその結果だと思っています。英恵は硬筆でも一生懸命練習をして金賞をとることができました。これらは彼女の自信につながっていると思います。これからも色々な事に一生懸命取り組んでいってほしいと思います。そのためにも、彼女が頑張るためのエネルギーを十分蓄えることができるような生活を創っていききたいと思っています。

高野 真夕子

仙道家



少しづつ、春の近づきを感じる今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。

先日、夜から朝にかけ雪が降りました。洗濯物は乾かない、子どもたちもぬれて帰ってくるだろう。雪が降って喜ぶのは子どもと犬くらいなものだと朝から少し憂鬱に



田口 貴子

なっていました。ですが、登校を見送ろうと外へ出たとたん、はしやぐ子どもたちに負けじとつい、雪合戦をしたくなってしまいました。集まっていた子どもたちはすでに雪を投げ合っていました。中学生まで外に出て職員と雪を投げ合ってはしゃいでいたので、私も固い雪球を作り、職員、子ども関係なく投げました。

ぬれた手袋をいじったり、かじかんた手をもみながら登校した子ども達の後姿を見ながら、どんなに寒くても、暑くても登校していく子どもの後姿にたくましさを感じつつ、今日も一日頑張った事に帰ってきてほしいをはせた日でした。

竹花家

日だまりに春の野花がちらほらと顔を見せてくれています。

小学校卒業を迎える要と美也子は、それぞれの小学校への思いを言葉にしています。楽しかった思い出を名残惜しそうに語る美也子と、小学校も楽しかったけど中学校のほうが楽しめると期待に胸を膨らませる要。ランドセルに別れを告げ、真新しい制服に身を包んで自転車にまたがる姿を想像すると、時の流れのはやさに驚かされます。

高校生の清貴は一学期、二学期と定期テストに苦戦を強いられておりましたが、三学期の好成績には皆が驚き、成長をたくさん喜ぶことができました。おかげさまで無事進級を頂き、みんなよりちょっと早めの春休みです。

春を迎えるこの季節は、学年が進んだり、上の学校に進んだりと変化が大きい時期です。期待したり不安になったりと、子どもたちの心の中も変化が大きいことでしょう。おいしいものを食べてよく寝て、ゆつくりしたり遊んだりして、それぞれが大きいのびのびと歩んでいってほしいと願います。

鈴木 洋一

プリズム

河のほとり

倉澤家

この数ヶ月間、卒園生たちと顔を合わせることが多く、思い出話に花を咲かせる機会が増えました。五年間勤めた呉服屋を退職し、医療事務の資格を取得した楓はただ今失業中。就活をしながら週の何日かを倉澤家で過ごしています。近くにアパートを借りて、夕食を食べに来ている一歳年上の香織とは、二歳の時から同じグループで過ごしてきたため、疑似姉妹関係ができあがり、楓がやってくるのはいつも香織が休みの日。特に二人で出かけた時、何かをしているわけではないのですが、お互いに同じ空間にすることでホッとするようです。

二人が揃うと、子供の頃ケンカをしたこと、同じグループで過ごした嬉しめの思い出等々、話はつきません。

二人の話題に上がった嬉しめ、ついこの間会いました。実は彼が高校生の頃、大あばれして私も被害(?)を受けたことが

倉澤 智子

ありました。その時のことが話題になると、彼はいつも大きな体小さくして、頭を抱えて苦笑いします。その当時、その出来事は私と彼にとって大事件でしたが、十数年経った今となつては笑い話です。

子どもたちとの生活は、楽しいことだけではありません。悲しいこと、苦しいこと、時には傷つけ合ってしまうこともあります。それでも、一日一日の生活を積み上げ、その中でかけがえのない関係を作っていくことで、どんなマイナスな出来事でも、良い思い出に変えていくことができます。

今年高校を卒業し、新しい生活をスタートさせる予定の美季、来年、高校を卒業する予定の由子、この二人とも十数年後に思い出話に花を咲かせることができるように残された時間を、そして卒業していった後も、関わり続けていきたいと思っています。

原田家日記



寒さも幾分和らいできたように感じますが、いかがお過ごしでしょうか。この一年間、同じような毎日を繰り返しながら過ごしたようですが、日々成長している子どもたちとの時間を振り返ればそれが同じではないのを感じます。そしてその貴重な時間に関わらせていただいていることに感謝します。

穏やかな夕食の時を持って一日の終わりを迎えることが日常生活の理想ではありますが、原田家ではいつも「穏やかな夕食」とはい



小西 剛史

きません。何しろ原田サンドは五人の小学生と三人の中学生の具を、頼りない幼稚園児とたまにしか居ない高校生の食パンで挟んであるようなものです。厚みがありすぎて少し押しつぶさないと口に入らないでしょう。しかし押しつぶすと具が横からはみ出してきますので気をつけなければいけません。とても騒がしいサンドウィッチですがとても美味しく味わい深いです。我々大人は話題提供や雰囲気作りでスパイスのような役割をしながら、それぞれが主役になれるような関わりを心掛けていきたいです。私は激辛スパイスになりがちなので自身が主役になってしまわないように気をつけたいです。

養育論の試み

(3)「祝いとしての日常」

菅原 哲男

これまで、児童養護施設を利用するに至った子どもたちの事情などについて述べてきた。前回は、児童養護施設を利用するに至った子どもたちをどうとらえるのかという、子ども観について記した。

児童養護施設を利用するに至った子どもたちは、自らに何の責任や過誤などが無いのに、津波のような困難に飲み込まれてきた。そして施設利用という望ましくも誇らしくもない状況に放り込まれたのである。その上、施設に入ったその日から、父や母など家族に恋い焦がれるのである。それらを愛してやまないのだ。津波のような困難は子どものせいではなく家族によってもたらされたのである。その家族を無条件に恋い慕う。愛しているのである。迫害する者のために祈り続ける子どもたちなのである。これを高貴といわず何をそう呼ぶのだろう。だから、ほとんど無条件に子どもを尊敬し愛することの根拠がここになるのだ。

そのように子どもをとらえるから、絶対受容が成り立つ可能性があると考え

えてきた。

絶対受容という言葉の硬さから、拒否的な反応もままにあるが、ここでは浅学にしてそれ以外に表現を識らないのである。しかし、昨年の月刊福祉九月号に特集「子どもたちの命とそだちを守る」に加賀美九祥編集委員が、「子どもの絶対依存と養育者の絶対受容に始まる養育である」と冒頭に記している。絶対受容は少なくとも児童養護施設光の子どもの家の四半世紀あまりの歴史に、多くは女性たちの若く美しい青春の時を、それへの試みを志とした命が充ち満ちているのである。

受け入れは、最も幼く柔らかな乳幼児期の子どもたちに決定的な影響を与え、その人生を左右するものなのである。そのことは、ウイニコットやボールビーなどにさかのぼらなくても、芹沢俊介の「イノセンス論」を基底にした受け止めの必須なことについて多くの著作に詳しい。

そのような受け止めの長くても一年ほどを経て、子どもたちはそこを暮らしの拠点にしていける。

入所したその日から続く、「君に出会ってよかった!」「君が生まれたことをこんなに喜んでるよ」と、機会を捉え、機会をつくり伝え続ける、「祝いとしての日常」を形成し続けていくのである。

さて、祝いとしての日常という言葉には矛盾がある。

通常祝いとは非日常なのである。毎日お正月やクリスマスなどであつたら日常である暮らしにはならないのである。この国で祭りは、農漁村などの第一次産業が生み出した暮らしの工夫であり句読点でもあるのだ。辛く長い労働の毎日とその割には少ない利益。仮に農業を考えてみれば、米という字は米になるまで八十八回手がかかるという理からなると聞いてきた。だからお米や食べ物に大事にするよう言い聞かされてきている。早春の種蒔きから田植え、草取り、稲刈り、脱穀・その間田起こし水掻き、水やり、水落し、ハザ掛け等々大変な労働の質と量が重ねられてやっと米になるのだ。早春から田植えまでが一段落すると夏祭りがあり、収穫して米になる頃秋祭りがある。長く辛い労働の連続の切目を見計らって祭りをするのだ。その日は何をしても赦されるような日なのだ。

きれいに着飾り、いつもよりおいしいものを食べて酒を飲み、踊り祝うの

である。

このように祝いは非日常なのである。それを日常化しようというのが光の子どもの家の生活づくりである。

やって来る子どもたちは、いつの時代も時代の壁のような暮らしを強いられてきた。誰にも訴えようがない身内の恥のようなことどもの連続が生まれて以来の彼らの暮らしだったのである。失われたそれまでの時間を埋め合わせ、喜び祝う必然のなかに彼らはあると考へてきた。生まれたことを喜ばれなかった時間を倍して喜び合うべきだ、と。関わりの中でそれを伝える日常が彼らが生きる力を取り戻すには必須なのである。

それでも祝いは日常化できない。出来ないが心からその出会いを祝い、暮らしあうことを喜ぶ場面や時間などを可能な限り連続して作り出していく意志が必要なのである。

農夫が米にかけける手数を越える決意がどうしてもなければならぬ。農夫は毎日の農作業を、作物をいたわりながらし続けていく。そのような地道で長い取り組みが子どもたちの心をほぐし和らげ、豊かな表情を作り出し、成長し続けるのである。不可能なような祝いとしての日常はそのためには必須なのだ。

続・光の子らしく

現場から

庭のあちこちに黄色や紫のクロッカスがほつこりと咲き始めました。時折、冷たい風に驚かされますが、随分と春めいた気分になることが増えました。皆様、お元気でいらつしやいますか。

「ままは丘実のみかただよね。丘実もままのみかただよ。」

その手紙は、随分前に丘実ちゃんにくれた物です。丘実ちゃんの鉛筆を握るそのまるっこい手さえも見えるようなその手紙は、見るたびに私をうつ向かせますが、同時にとても大切なところで私を支えてくれています。ややもすると、つい一端の大人面して、何でも

岩崎 まり子

いうこととするの。“何で言われた通りに素直に従えないの”“何で・・・”と丘実ちゃんを責め立ててしまいがちな私自身をギリギリのところまで引き戻してくれているのです。

丘実ちゃんは今、一人で入浴しています。たまに一人で怖いなあとと思うようなことがあると(例えばテレビで怖い番組を観た、行方不明の老人についての放送があった等)、「まり子さん、一緒にお風呂入ろう。」

と言ってきます。けれど、入った入ったで照れてしまつて、「一緒に入りたいんだけどお、何か恥ずかしい。こっち見ないでね。」



と言ったりするなど私にとってはやはり、とてもかわいい丘実ちゃんなのです。

ですが、学校では先生の指導に「従わない」「従おうとしない」態度の悪さについての指摘や学習の遅れについてのご指摘は深刻でした。謝罪しつつも、「本人の気持ち次第なんです。」には、何故か違和感を覚えました。その「気持ち」を何とも出来ないのは彼女の責任ではなく、私の責任という意識からくる違和感だったのかもしれない。

先日、授業参観に行かせて頂き、何となく分かってしまったのは、丘実ちゃんにとってあそこは自分の陣地ではないということでした。先生は教えようとして下さり、個別に声をかけて下さるし、級友に自分から話しかけたりもします。丘実ちゃんにも笑顔がありました。

けれど、少しずつ大人になっていく級友たちとの隔たりは丘実ちゃんにとってとても大きく、「はい、はい」

と挙手が活発な授業風景は、自分だけがわからないんだ“というコンプレックスを刺激され自分の存在が脅かされるような、まさしく敵地という感じなのではないかと感じてしまったのです。

味方を強く意識することは、同じ強さで敵をも意識するということでしょう。普通に生きてこれる生活の中では、“敵”を意識することなどなく、漠然と周りを善だと捉えているのではないのでしょうか。丘実ちゃんは、鋭い嗅覚で、その場、その場で敵味方を判断します。その入れ替わりも勿論可能な人間関係です。いつの日か、そんな嗅覚は必要ないと思える日がくるよう願います。

「まりさんが何でここに居るかわかる?」

と尋ねたとき、丘実ちゃんは、「わかる、と思う。」と答えました。

「まりさんは、丘実ちゃんが幸せに生きられるように願っているんだよ。それを伝えるためにここに居るんだよ。」

と言うと、

「わかってる。」

と言って丸い頬をぶくぶくさせて笑っていた丘実ちゃん。

どんなことがあってもその笑顔の傍に居続けられるようにと願う新しい年度の始まりです。





2011年度も基準外職員確保のための
バザーを行います。バザーの品物のご協力もよろしくお願ひします。



♡ 光の子どもの家バザー実行委員会♡



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2010年12月～2011年1月

2010年12月現在

幼児9名 小学生13名 中学生9名 高校生6名 措置外4名 計41名

5日 第一アドベント

9日 幼稚園との定期連絡会 園での元気な様子や家での様子などの確認 日頃からの篤いご協力に感謝

11日 子ども会クリスマス会

12日 第二アドベント

13日 小学校との定期連絡会 二学期を終えて冬休みを迎えるにあたり成長や課題の確認 ご協力に感謝

19日 第三アドベント

20日 森公子様のご招待で東京カテドラル聖マリア大聖堂でのコンサートへ チェコ少年合唱団による素晴らしい歌に感動 心より感謝

24日 クリスマスイブ燭火礼拝 一年間を振り返って互いの気持ちを言葉にして贈りあった

25日 クリスマス祝会 ページェント劇では子どもたちが練習の成果を十分に発揮してくれた 多数の方々が見に来て下さる 心より感謝

28日 餅搗き ヨイショヨイショのかけ声と歓声と笑い声の中みんなで餅を搗く

2011年1月

1日 元旦礼拝 新年を迎えてそれぞれの今年の抱負を語る

5日

多数の卒園生やご家族の方々が来訪 賑やかなお正月正月気分をぶっとばそう会 すき焼き鍋を囲んで賑やかだった正月から新学期に向けて気持ちを切り替えるオペラ歌手の坂井田真美子様他四名来訪しプロによる楽しい歌やオペラを披露して下さい 心より感謝

11日 各学校始業式 締めくくりの三学期が始まる

15日 聖学院大学ワーク 五名来訪

17日 中学校との定期連絡会 三学期の課題を確認 特に受験生について細かく情報交換 ご協力に感謝

19日 若月健悟牧師による職員礼拝 杉本英夫様来訪 感謝

21日 光の子どもの家後援会によるそば会 子どもたちが通っている小学校の先生方が来訪 心より感謝

《12・1月の物品ご寄贈者》

須藤 金久保進 セカンドハーベストジャパン 岡本雅道 加須大利根地区郵便局 落合洋平 羽鳥唱平 世界保険サービス 伊藤宏 長谷川勇 高橋和男 溝呂木武幸 土信田隆 瀬尾弘明 坪井やす子 山水まさ 下川 松本明子 浜田文昭 後藤多嘉史 金子太郎 東洋英和女学院小学部 塩手和彦 真田明恵 飯田洋司 三国コカコーラボトリング 木暮伸二 I L B S 牟田口靖子 黛執 大橋清栄 上田清司 BEAMS 古河店 武田美穂子 浅野幸恵 山内外喜雄 竹内辰也 鈴木晴子 他多数の御各位様

/// /// 反 射 光 /// ///

☆すっかり春らしくなり内陸部では今年初めての夏日を観測する陽気となりました☆三月十一日の東日本大震災において被災された方々に心よりお見舞い申し上げます☆光の子どもの家の子どもたちはおかげさまで皆無事に新年度を迎えそれぞれの場所での新たな歩みを始めております☆巻頭にありますように二〇一一年三月の理事会において前施設長菅原哲男が社会福祉法人光の子どもの家の理事長に就任いたしました☆それぞれの子どもたちの学年が一つずつ進む中で今春も二名の卒園生が大学に進学します☆光の子どもの家自立進学基金の存在が子どもたちの進路選択の幅を確かに広げ自らの可能性を信じて挑戦する希望の心をもたらし、下さいます☆寄り添う私たちはより一層の感謝の心を持って子どもたちと共に歩みます☆東日本大震災の映像が繰り返し映されるテレビを観ていますと大人でも恐怖を感じることもありますが子どもたちは尚更です☆ましてここに暮らす子どもたちは大津波のような想像を絶する経験を抱えて入所に至っているのです☆福島の子力発電所の事故や続く余震などまだまだ安心できる状況ではありません☆子どもたちが少しでも不安な気持ちを和らげることができ、ますようにお祈りしつつ関わりを続けます☆

(洋)